令和7年度　大田区立大森第三中学校　自己評価　報告書

○　本校の概要

令和8年3月4日

◆教育目標　社会の一員としてたくましく生き抜く人間性豊かな生徒の育成をめざし、以下の目標を掲げる。
　　○人権尊重の精神と態度を育てる。 ○豊かな情操と健全な心身を育てる。 ○自主性を伸ばし創造性を育てる。 ○自ら進んで学ぶ態度を育てる
◆学校規模　生徒数506名、学級数15学級
◆本校特色 ○地域行事・ボランティア活動参加（新井宿福祉園運動交流会、ガーデンパーティ、新井宿スペシャルデー、大田文化の森夏祭り、新井宿児童館親子デー、自治会連合運動会、山王三・四丁目自治会子どもまつり・防災訓練、入二小フェスタなど）
　　○生徒会や各種委員会を中心とした生徒主体の活動（生徒会朝礼、SNS学校ルール策定、いじめ撲滅運動、など学校行事での実行委員会組織による企画・運営など）
　　○学校運営協議会を中心とした学校・地域協働体制による、学校運営の基本方針の承認や、課題解決に向けた検討等学校運への参画。地域への文化の発信として、吹奏楽部の定期演奏会など主催事業の運営
　　○スクールサポート三中を中心とした学校支援のコーディネートによる充実した教育活動の展開（図書室ボランティア、職業講話講師、職場体験受入先、土曜補習教室講師、部活動支援、英語検定、漢字検定試験監督、ガーデニング）

○　自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	方向性	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標		成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価	人数	コメント
個別目標1 予測困難な未来社会を創造的に生きる力を育成します	社会の様々な課題を自分事として捉え、主体的に考え、他者と協働し、問題解決していく意欲や、予測困難な未来社会を切り拓いていくために重要な創造力や課題解決力、情報活用能力を育成します。	①STEAM教育等の教科等横断的な学びや科学教育を推進し、課題解決力や新たな価値を創造する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	4:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ80%以上。	4:	4	未来社会を創造的に生きる子どもの育成にむけて、考え方の基盤となる学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指すことは重要である。その中で、基本的な学力の定着の確保とそれを基盤とした学び方の定着は、論理的、科学的な思考力の育成につながる本校の課題である。令和7年度の生徒の実態として、生徒のアンケート結果では、「授業では、他の人と話し合ったり、調べたりして課題の解決に取り組めている。」に対しての肯定的な回答は91.6%であり、生徒たちは、教育活動を通して自ら課題を把握し、その解決にむけての見通しをもち、方策として調べ学習に取り組んでいる様子が表れている。社会科でのタブレットを活用したそれぞれの考え方の発信と共有、理科での実験をもとにした仮説の確認など多くの体験的な学習を行っており、生徒が自ら考えた内容を互いに発信しあい、自己の考えを修正するなど思考力を伸ばす場面が設定されている。さらに、校外学習でも班による事前学習でのテーマに沿った調べ学習などを事前学習に取り入れ、データの収集と活用をする姿勢をもたせる指導を継続して実践している。このように教科やその以外の活動において課題に対して、どうすれば解決にたどれるかという視点を大切にした指導を行い、生徒の課題解決の力の育成を図っている。また、体験活動と事前・事後の学習活動を系統的に展開することで、自分の取組の自己評価する姿勢や自らの取組の判断と計画・修正を行う力を培っている。また、調べ学習では、ICTを活用した展開を通した個別学習と、それを共有するための共同学習を取り入れ、他者と協働していく力の育成を図るとともに情報活用能力を育む指導を展開することができてきた。さらに、生徒アンケートの「日ごろの学習を大切にして、自分の将来を考え、取り組むことができる」では、81.7%の生徒が肯定的に回答している。これは、職場体験を中核として、地域ボランティア等の外部人材を活用して、働くことの魅力や地域の一員としての自覚を育み、生徒が自身の生き方を主体的に考える態度や基礎的・汎用的能力を伸ばせていることにつながっている。これは、日頃の教育活動での地域との連携した体験活動を実施している結果が表れている。1年生による職業講話、2年生での職場体験などは、地域の方や受入れ事業所の方々との連携を深めている。職業講話では、生徒のニーズも反映しつつ地域とのつながりをもった方にきていただく。職場体験では地域の事業所を開拓し、昨年からは職場体験事後発表会に受け入れ事業所の方にきていただくなど、相互交流を深めて、生徒の地域の一員としての自覚を高める機会を継続して取り組んでいる。こうした取組を通して、生徒のキャリア発達を支援し、生徒が自分自身の生き方を主体的に考える態度を育み、基礎的汎用的能力の育成に取り組んでいる。	A	11	職場体験をしている生徒は、みんな楽しそうでキビキビ働いていており、周りの大人達も自然に笑顔になり、とても良い取り組みになっている。この経験から、他者とのコミュニケーションをとることで、学ぶことは多くなっている。また、その体験の事前事後指導を通して、課題に対応してしっかりと考えることを通して、体験からの学びを自分の中に落とし込むことができている。今後も、考えること、体験することの楽しさを味わってほしいと期待している。なお、一方で生徒間のスキル差を埋める支援の強化は必要であると感じる。そうした面から、自ら考え抜く力が育まれており、今後はその力が多教科や日常成果へも汎用的な活用できるよう、指導の工夫が課題である。生徒アンケートの肯定的回答は91.6%、81.7%と高水準を示し、思考力や学ぶ意欲は着実に築かれている。また、生徒自ら課題を見つけ、仲間と協力しながら学びを深めている姿は学校公開でよく伝わっている。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		②学校内外での様々な体験活動や自己評価する習慣づくりを推進し、自ら考え判断する力や、他者と協働していく力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	3:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ60%以上。	3:			B	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		③情報技術を適切に活用した授業の実施を通して、情報活用能力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	2:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ60%未満	2:			C	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		④地域ボランティア等の外部人材を活用して、働くことの魅力や地域の一員としての自覚を育み、生徒が自身の生き方を主体的に考える態度や基礎的・汎用的能力を伸ばす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	1:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ40%未満	1:			D	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
個別目標2 世界と繋がる国際都市を担う人材を育成します	英語での実践的なコミュニケーション能力を高めるとともに、我が国や郷土の伝統文化に触れ、尊重する心や、協力していく態度を育成します。また、国際社会・地域社会に関心をもち、持続可能な社会を形成していく態度を形成します。	①外国語教育指導員の活用などにより、英語に慣れ親しみながら会話をする機会を増やし、英語力やコミュニケーション能力の向上、豊かな国際感覚の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	4:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ80%以上。	4:	4	生徒の英語でのコミュニケーション能力の育成について、英語の教科指導はもちろん、社会科や特別の教科道徳をはじめとする各教科での指導を通して取り組んでいる。現代社会における地球環境の課題などについては、理科を筆頭にさまざまな教科での取り組み、また、校内緑化に生徒有志のボランティアの参加などもあり、様々な場面での取り組みが見られる。特に本年度は大田区中学校理科発表会で発表をする機会もあり、本校の日ごろの環境についての活動を発表し優秀賞を得ることができるなど、成果も上がっている。なお、生徒アンケートの「検定に挑戦したり、補習教室・英語カフェなど、授業以外の学習環境で取り組めている。」での肯定的回答は、62.7%であり、70%を下回っているが、これについては英語検定への受検も含め生徒の取組の自己反省が表れと考えられる。保護者の肯定的回答は88.1%と学校での資格取得の取り組みに対して肯定的に回答をしている。10月の3年生による全員英検をはじめとして、今後も積極的に検定を受検し資格取得に挑戦する雰囲気ができるよう、応援してくれるスクールサポート三中など地域と連携しながら生徒に取り組みをすすめていく。また、英語の授業ではALTを効果的に活用して話す力を伸ばせるように取り組んでいく。さらに生徒とALTの人間関係の醸成により校内さまざまな場面での英語のやり取りができるようになっており、昼休みの英語カフェの実施など、生徒が気軽に英語と触れ合う環境が整備されてきている。また、生徒アンケートの「定期テストの結果だけでなく、様々な面から学習評価をしてくれている。」では84.4%の肯定的回答があるように、話す力、書く力、聞く力、読む力をそれぞれ伸ばすよう、さまざまなアクティビティを取り入れた活動を実践している。
英語力とともに、人権教育を推進し、他者を理解し尊重する心の育成も推進している。生徒アンケートの「学校では生徒一人一人が大切にされ、人権が守られている。」では肯定的回答が92.3%であり、生徒が学校で安心に楽しく過ごせる学校生活となっていることが表れている。本校の課題である不登校対応についても、担任を初期窓口として、学年や支援委員会での共通理解を図り、継続的な対応を行っている。また、生徒たちの心を耕す特別の教科道徳の授業は計画的な展開を行い、生徒の課題に寄り添った項目を扱うなど、生徒の心の育成を育めるよう指導を行っている。
さらに、持続可能な学びとして、総合的な学習の時間の計画的な実施により、生徒の興味関心をもたせる指導をしている。生徒アンケートの「総合的な学習の時間で、体験を通した特色ある教育活動をしている。」では、87.7%が肯定的な回答をしており、体験を通して国際社会・地域社会への意識が高まる指導を展開していることが表れている。そして、こうした学びを通して、生徒が自分自身で学んでいる姿勢を身に付けさせることと、解決すべき課題を発見できるよう指導を展開している。こうした取組を通して、現代社会が抱える課題に対して正対できる力を育み、生徒が将来国際都市おおたの地で、活動できるような人材となるよう、学校生活を推進している。	A	11	昼休みの英語カフェの実施やALTの連携などで、英語のコミュニケーション能力の育成に取り組んでおり、大きな強みであると考える。ただ、検定等への挑戦意欲が70%を下回ることを課題とし更なる動機付けを期待している。コミュニティオープンカレッジでは、地域の方々にも今の時代の英語教育の体験があったが、ALTの方をはじめ、実践的な英語教育がなされており、グローバルな舞台で活躍するためを発信しており、授業を通じて異国の文化と触れ合い、他者に対する理解や思いやりが育まれている。また英語のみならず、土曜学習サークルも皆勤の生徒がいるなど、多様な持続可能な取組がなされ、工夫されていると感じる。環境学習や人権教育を通じても、多角的に国際感覚が養われている。また今年度、日ごろの環境課題についての活動を発表し、区内で優秀賞を得るなど実績も挙げられた。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		②我が国や郷土の伝統や文化の学習、人権教育を推進し、自分とは異なる文化や価値観をもつ相手を理解し、互いに尊重し合う心の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	3:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ60%以上。	3:			B	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		③現代社会における地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて考え、行動する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	2:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ60%未満	2:			C	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		④実用英語技能検定を実施しするなど、検定への意識をもたせ、グローバル化に対応できる英語力を身に付け、積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲を育む。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	4	1:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問の回答がそれぞれ40%未満	1:			D	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
個別目標3 一人ひとりが個性と能力を発揮するための基礎となる力を育成します	児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。	①道徳科を中心とした各教科等での学習などを通じて継続的に道徳教育を実施し、豊かな情操や道徳心の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	4:学習に積極的に取り組めている生徒の割合と学習効果測定の校内平均正答率が区内平均正答率を上回っている割合がそれぞれ80%以上	4:	2	生徒がこれからの社会を生きていく上で、自分自身のキャリアを切り拓いていく力をもつとともに、それを支える力として確かな学力はとても大切である。自己の個性を発揮するためには、発信する力の重要性は増している。そうした中、4月に実施した学習効果測定では区の平均を下回っている教科は11あり、下回っているのも2ポイントから若干と、だいぶ平均に近づきつつある。しかし区が示す目標値への達成率は57.5%と、基礎学力の定着は依然本校における大きな課題である。また、目標に対する達成率は5教科について分析し平均してみると、56.7%となっており、基礎基本の定着にむけて今後も継続した指導が大きな課題があることが読み取れる。こうしたことから、基礎基本の定着と思考力の育成にむけて、夏休みなどに各教科で分析して授業改善推進プランを作成し、二学期以降の実践に活かしている。書いたり、解いたりという具体的な作業を授業の中に取り入れて、定着にむけて取り組んでいるところである。なお、生徒の実態として、生徒アンケートの「あなたは、先生の説明をよく聞いて、学習に積極的に取り組めている。」では肯定的回答は91.1%であり、授業中は静かにし指示に従おうという姿勢はみられている。ただ、指示を聞き返したり、課題での自己の考え方の現れやまとめなどをみてみると、生徒が主体的に考えて自分の力としようという姿勢で学習に取り組んでいる部分については、これからも課題であることがわかる。生徒の様子としても日頃の学習への取組についての深まりと家庭学習など学習習慣の定着については大きな課題であることが表れている。また、「あなたは、毎日の復習など家庭学習に取り組んでいる。」についての肯定的な回答は65.4%であり、生徒自身も家庭での復習などが十分でないと感じている実態も表れている。課題の提出や放課後の補習など、教師からの投げかけは行っているが、生徒が積極的に取り組む姿勢については課題があり、こうしたところが学習効果測定の結果となっていると考えられる。
また、「あなたは、宿題や提出物を必ず出し、忘れ物をしないよう気をつけている。」については84.9%の生徒が肯定的な回答をしている。これについても、生徒は課題などについては成績に関係してくることから重要視していることが表れている。これについても、日ごろの学習習慣や見通しをもって取り組む計画性につながる一面であり、今後も、生徒のよりよい生活リズムと家庭学習の確立にむけて、補習教室の活性化や学習の取り組み方の指導など継続して行っていくことが必要である。	A	9	生徒たちの実態として、宿題や提出物、忘れ物について気をつけていると、約85%の生徒が回答できている、ただ、学習効果測定等の結果からは、基礎学力の定着に課題がみられるが、これは学習習慣の定着ができていない為と考えられる。基礎的な力とともに自ら学ぶ姿勢をもつことは、社会に出てからも常に自ら学び続ける人が活躍していることから、とても重要である。そこで、その習慣を身につけさせる為に継続して指導するとともに、やる気にさせる働きかけ、声かけを期待する。また、各教科で、「これだけは身につけよう」という範囲やねらいを明示して、考え理解し習得させられるよう、生徒が学ぶよろこびを感じられることを期待している。授業では生徒は積極的に取り組めている。家庭学習についての啓発も有難く、今後も家庭との連携も視野に入れ学力向上に取り組んでいってほしい。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		②学習習熟度に応じた指導や個に応じた学習支援、各種検定の実施を通して、すべてのこどもに確かな学力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	3:学習に積極的に取り組めている生徒の割合と学習効果測定の校内平均正答率が区内平均正答率を上回っている割合がそれぞれ60%以上	3:			B	2	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		③体育や保健体育の授業など様々な機会を通して、健康教育や食育を推進し、基本的な生活習慣の確立を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	2:学習に積極的に取り組めている生徒の割合と学習効果測定の校内平均正答率が区内平均正答率を上回っている割合がそれぞれ60%未満	2:			C	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		④乳幼児期から中学校まで円滑な接続を行うため、保幼小の連携や小中一貫の視点に立った教育を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3							
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								
		⑤基礎基本の学習を確実に定着させるため、精選した課題を与えて家庭学習の時間増加、習慣の定着を促す。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	3	1:学習に積極的に取り組めている生徒の割合と学習効果測定の校内平均正答率が区内平均正答率を上回っている割合がそれぞれ40%未満	1:			D	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。								
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。								

個別目標4 学校力・教師力を向上させます	校内研究等のOJTの充実を通して、教師の授業力を向上させます。また、質の高い教育を実現するため、学校の組織的な運営力を向上します。あわせて、教師がやりがいをもって働くことができる魅力的な環境づくりを進めます。	①児童・生徒一人ひとりの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点による授業改善を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	4:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問「丁寧でわかりやすく専門的な内容が理解できる授業が多い」の回答がそれぞれ80%以上	4:	4	教師の授業力向上にむけては、校内研修等を通じて生徒の実態を把握し、それに応じた指導の見直しを行ってきた。今年度は、生徒理解にむけて個々の生徒理解の大切さ、不登校生徒の理解と有効な支援について研修を行い、講演会を実施して、小中連携で研修をもつ機会も行っている。こうした小学校との連続した指導の観点で指導にあたることで、課題を読み取れる力や学習に対する取り組み習慣、基礎基本の定着などに対して有効になってくると考える。今後も、小学校の指導でも意識して取り組むことが大切であることより、小中一貫教育の会等で結果を発信し、小中連携での指導で、児童生徒の力を育成していくことが必要であり、取組をすすめている。また、日頃の教師の授業については、生徒アンケートで「先生方の教え方は丁寧でわかりやすく、専門的な内容を伝えてくれる。」では90.6%と多くの生徒が授業についての肯定的に評価をしている。これについては、日頃よりの専門的な内容を生徒にどのように伝えるかの教材研究とともに、教科内での共通理解だけでなく、教授法など教科を超えたOJTが実施され活用されていることが表れている。また、「タブレットなどを使うことで、学習内容をわかりやすく理解できる。」では90.9%の肯定的回答があり、ICTを活用した授業改善が進行していることと生徒がICTの活用について普段使いの実態となっている結果が表れている。こうしたICT機器を活用することで、教師が自らの授業改善を進め、生徒に対してよりよい授業を行うと取り組んでいる。授業改善に伴い、教材の研究などについても教師間での共通理解を図るために、データのクラウド化や学びポケットの活用によるデータの活用など積極的に取り組まれている。また。操作や活用方法については、教員間でも共通理解を図ったり、OJTを行うことで、教科を超えて教員集団としてのレベルアップにつながっている。さらに、ICTサポーターに授業のアイデアを伝え、具体的な操作を学ぶなどしており、オクリンクプラスなどの授業への導入が、多くの教科で行われている。なお、ICTの活用については授業だけでなく、校務の効率化など改善についても重要な役割を果たしており、データの共有や取組のICT化などが図られており、校務の効率化が図られている。教師へのアンケートの「ICTを活用して校務の効率化が図られたか」でも95%の肯定的回答と大幅に向上していて、業務改善がいっそう進んでおり、教師がICTの活用を図って業務負担が軽減している実感はもつことができている。これまでに無蓄積してきた経験やデータを活用して、今後の業務改善の視点をもち取り組むことで、生徒と向き合う時間がもてて、働きやすい職場環境を整えていく。	A	10	生徒理解を深めながら、授業改善を進めている点に学校の前向きな姿勢を感じます。教師の授業力に関する生徒アンケート「丁寧で分かりやすく専門的」の肯定的回答が90.6%と高い。そして、小中連携による教員間の共通理解が推進され、OJTによる教員同士の学び合いの姿勢は、教職員の指導力向上が図られており、非常にすばらしい取り組みであり、今後も継続してほしい。また、ICT活用による校務の効率化、負担軽減を図り、子供たちに向き合う時間の創出を期待します。授業は、よく工夫されていて感心する。また、不登校の生徒にも、それぞれの状況に応じた丁寧な対応ができるよう努力されているのがわかります。今後も、OJT・ICTの活用により、小中連携での生徒理解をさらに深め、一人ひとりの課題を汲み取り、有効な支援と細やかな指導を望む。
		②教職員がそれぞれの専門性を生かしたり、地域の特色を生かしたりして教育活動を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	3:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問「丁寧でわかりやすく専門的な内容が理解できる授業が多い」の回答がそれぞれ60%以上	3:			B	0		
		③教職員の業務適正化等に取り組み、児童・生徒に教員が向き合う時間を確保する等、ウェルビーイングを高める取組を行っている。	4:「おおむね高まっている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 1:「おおむね高まっている」と回答した教員が60%未満であった。	3	2:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問「丁寧でわかりやすく専門的な内容が理解できる授業が多い」の回答がそれぞれ60%未満	2:			C	1		
		④ICTを活用した校務の効率化、生徒や保護者との連絡等の効率化等、負担軽減・働きやすさの向上が図られている。	4:「おおむね図られている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね図られている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね図られている」と回答した。 1:「おおむね図られている」と回答した教員が60%未満であった。	3	1:生徒への学校教育活動点検アンケートの設問「丁寧でわかりやすく専門的な内容が理解できる授業が多い」の回答がそれぞれ40%未満	1:			D	0		
個別目標5 自分らしくいきいきと生きる ための学びを支援します	困難のある児童・生徒一人ひとりの状況にあわせて教育環境を整えるとともに、相談機能の充実を図ることで、すべての児童・生徒が自分らしくいきいきと生きるための学びを支援します。	①インクルーシブ教育システムの構築に向けて、教員の資質・能力の向上や校内における支援体制の充実、特別支援教室巡回指導教員との連携等を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	4:WEB・Q-Uで「勉強や運動等で友人から認められていると思う。」での肯定的な回答が80%以上	4:	4	生徒が自分らしくいきいきと生きるための学びの環境として、基盤となる学級の居心地はとても大切なものである。また、生徒どうしの人間関係の構築にむけて課題になりそうな点について把握したり、教師が学級経営等の指針に役立てられるように学級の傾向をつかむツールが必要である。そこで学級の様子を把握するために年2回、WEB・Q-Uの調査を行い、その結果について分析を行っている。各学年の学級満足度を平均すると、61.5%であり、昨年の52.9%から大幅に上昇している。また、自分が認められていると感じている承認群が14.1%、互いに関わりあう不満足群が13.9%であり、友達に認められたり、関わりがあったりして、集団生活に取り組んでいるのは89.5%の生徒が、何らかの形で互いに関わり会いながら学級生活を送れていることがわかる。ただ、こうした分析で10.5%の生徒が認められていないと感じており、今後も、生徒ひとり一人の状況に応じて、教師の働きかけが必要であり、きめ細かい学級経営が今後も継続して必要である。さらに、今年度は新規採用教員が6名となり、そのうちの2名が担任となっている状況である。こうしたことから、学年体制で各学級との関わり、指導を展開しており、学級経営などOJTを進めている。さらに、WEB・Q-Uの結果をもとにして、学級経営の対応策等を検討し、生徒たちにとってよりよい学校生活の基盤がつくれるよう、指導を進めていく。 また、不登校生徒についても本校の課題であり、本年度の不登校の出現率は6.3%であり、昨年の4.14%から上昇している点は懸念である。体制として、今年度も週一回の支援委員会や月一回の地域連携支援会議を通して、生徒1人ひとりの状況を管理職・学年・養護教諭・登校支援担当・SCで共通理解を図り、働きかけについて確認している。また、状況により支援がない生徒がいないか、またどのような支援が必要かを検討し、外部機関に関わり、何等かの形で生徒に対しての働きかけがあるようにして取り組んでおり、現在30名以上の不登校生徒で、家庭との連携や外部機関も含めた支援が関われていないケースはないようになっている。また、行事ごとの担任などからの働きかけ、登校したときの居場所づくり、ICTを活用したつながりなどを行い、学校へのつながり感をもたせ登校につなげる働きかけを行っている。こうした取組を通して、欠席が続く状況からの復帰率は26.3%となっている。別室の対応などについても、登校支援員と学年教員が連携して支援にあたり、生徒たちが登校して個別に時間がとれるよう、対応なども丁寧におこなっている。今後も連携を密にして、生徒一人ひとりの支援を充実させ、生徒1人ひとりをきめ細かに把握していくことで、生徒が自分らしく学校生活を送れる支援体制を行っていく。また、発達などで課題を抱える生徒については、特別支援教室を活用して、管理職や養護教諭と巡回教員が連携することにより、生徒のそれぞれの特性に応じた指導が行われるよう環境整備を進めている。また、生徒1人ひとりの状況については担任との連携を図っている。さらに、いじめの課題に対しては、教員一人ひとりが生徒の様子を把握するとともに、生徒の訴えに耳を傾け、課題に対して迅速にまた毅然とした指導を行う。生徒にも、身近にいる大人に相談することの大切さについて日頃より指導することで、いじめを逃さない体制を整備している。また6月と11月のふれあい月間の取組により教師の指導、生徒への関わりについて見直し改善する機会をもち、いじめに対する指導の重要性について認識を新たにしている。こうしたことから、生徒アンケートの「生徒の悩みや相談ごとなど、先生方はよく聞いてくれる。」での肯定的回答も88.8%であり、今後とも生徒に寄り添った指導を推進していく。	A	11	本校における不登校の出現率は5%を超えており、大きな課題であると考えられるが、WEB-QU活用による居場所づくりに向けた工夫など評価できる取組が行われている。一方不登校率の増加は懸念される。今後も、教職員の専門的理解を深めるとともに、別室指導や外部機関とのさらなる連携を期待している。地域連携支援委員会などで地域や外部機関との連携も図られており、今後も継続した取り組みをしていってほしい。WEB-QU活用による学級での居場所づくりに向けた工夫は評価できる取組である。教職員の専門的理解を深めるとともに、別室指導や外部機関とのさらなる連携を期待している。生徒の多くが、自分の居場所を感じられている点は、学校の丁寧な関わりの結果であると感じる。取り残される生徒がいないことが評価できる。全体に生徒の表情が明るく居心地よく過ごせていることが感じられる。
		②学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等のための組織的な対応を実施している。	4:「組織的な対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満の教員が回答した。 2:60%以上80%未満の教員が回答した。 1:「組織的な対応ができた」と回答した教員が60%未満であった。	4	3:WEB・Q-Uで「勉強や運動等で友人から認められていると思う。」での肯定的な回答が60%以上	3:			B	0		
		③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携等、児童・生徒・保護者が相談しやすい環境を整備し、一人ひとりの能力や可能性を最大限に伸ばすことを意図した指導や支援を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	2:WEB・Q-Uで「勉強や運動等で友人から認められていると思う。」での肯定的な回答が60%未満	2:			C	0		
		④不登校生徒出現の未然防止を図るとともに、不登校問題に係る取組を実施し、不登校傾向を示す生徒の学校復帰率を伸ばす。	4:不登校生徒の学校復帰率が60%以上 3:不登校生徒の学校復帰率が40%以上 2:不登校生徒の学校復帰率が20%以上 1:不登校生徒の学校復帰率が20%未満	3	1:WEB・Q-Uで「勉強や運動等で友人から認められていると思う。」での肯定的な回答が40%未満	1:			D	0		
個別目標6 安心・安全で柔軟な教育環境を創造します	学校施設について、ICT環境等の教育環境の整備を推進するとともに、児童・生徒の安全・安心を向上させるための教育を推進します。	①学校や地域の伝統・特色や、安心・安全な学校生活づくりを踏まえて、学習環境を整備している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	4:生徒アンケートの設問「学習環境が整えられている」や「安全教育に取り組んでいる」「給食の安心・安全な提供」で肯定的な回答が80%以上	4:	4	学校施設について、ICT環境等の教育環境の整備も行われ、それをもとに授業等での活用がすすめられている。ICTサポーターは、教員の授業活用について把握を行い、とくにオクリンクプラスの活用については、授業の展開シーンに即した活用を提案したり、教員のほうから活用のアイデアを受けるなど、生徒の学習活動での活用について実践が積み重ねわれて、授業改善に寄与することができた。こうした活用状況から生徒アンケートの「タブレットなどを使うことで、学習内容をわかりやすく理解できる。」（前出個別目標4）での90.9%の肯定的回答などにあらわれている。これは、昨年度よりもさらに2.7%向上しており、今後の活用も期待できる。また、これまでに学びポケットを活用した連絡事項なども定着していたが、今年度途中から、tetoriの導入が行われより即時性ある情報の周知が図られるようになってきている。今後も習熟にむけて取り組んでいく。なお、生徒のタブレットの活用でも、連絡事項などクラスルームの活用がすすめられており、欠席生徒への翌日の連絡や委員会での資料の配布など、学習活動での使用とともに、日常使いも定着してきている。 さて、生徒の日頃の学校生活については、生徒アンケート「学習規律が守られ落ち着いて授業に取り組めている。」については肯定的な回答が89.7%であり、落ち着いた学校生活が送れている様子が表れている。これは昨年度も83.6%である高い水準で推移している。また、日ごろの学習状況についても観察していると前向きに学習に取り組んでいる様子がみられており、実態に即した数値ととらえられる。ただ、「学校全体が落ち着いた雰囲気で生活できている。」の肯定的回答は75.2%であり、生徒自身が自己の生活を点検しているので、多少厳しい目でみたものと考えられる。それでも、昨年度より10.3%向上しており、本年度生徒達は学習に前向きに取り組み、授業規律の確保についても教師は意識を高めて指導にあたっている状況が表れている。今後も継続して授業規律の確保と授業改善については、指導訪問や研修会、授業改善プランの作成などの機会を活用して取り組んでいく。 なお、生徒アンケート「学校は、施設・整備や安全点検や避難訓練や防災訓練など日頃から安全の確保に取り組んでいる。」での肯定的回答は93.0%であり、月1回実施の避難訓練での真剣な取組や学級で担任より実施している安全指導を通して、生徒の安全に対しての意識は高い。今後も防災の観点で生徒達が意識を高くもてるよう、実際に即して緊張感ある訓練を継続して行っていく。施設面でも建設より27年を経た校舎であるものの、生徒は大切に扱い、学校への愛着心が感じられる。施設のメンテナンス等では委託の用務主事が随時的に関わり、保守点検を行い、迅速に修繕に取り組んでくれているので、校舎の破損もなく、大切に使う姿勢が生徒にも浸透している。 生徒の学校生活に関わる給食についても安心・安全を旨としており、生徒アンケートの「給食は、安全安心で、内容や献立が工夫されている。」で95.4%が肯定的回答を示し、日頃の給食供給の良さを裏付けている。郷土料理給食やバースデー給食など、栄養士も献立に時期や地域を意識し、食育を進めている。生徒のアレルギー対応としては、養護教諭が関取りを行い、該当する生徒の家庭との連携を図って、その情報を学校や学年・担任と連携するとで、生徒の個々への対応をすすめ、児童・生徒の安全・安心を向上させるための教育を推進している。	A	11	日頃の安全教育や地域と連携した連携防災訓練では地域連携、自助・共助についての意識も育まれており、地域を意識した教育活動が進められている。学校が安全を重要と考え、日々対応することによって、その環境で成長する生徒自身の安全への意識にもつながると考える。安全・安心な環境づくりが着実に前進し、防災等安全確保、給食の安全性等も評価が高い。ICTの有効活用と施設管理の徹底により、安心な学習環境が整っており、落ち着いた学校生活の中で生徒が意欲的に学んでいることを高く評価する。「学校全体が落ち着いた雰囲気で生活できている」については、落ち着いているというより活発な印象があるので、今後も継続した学校生活、授業規律の確保にむけての指導を継続してほしい。なお、今後も安全で安心な栄養豊かな給食の提供と食育の充実を期待している。
		②避難訓練や安全指導日などを通して、危険や災害に対する教育を関係機関と連携しながら進めている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	3:生徒アンケートの設問「学習環境が整えられている」や「安全教育に取り組んでいる」「給食の安心・安全な提供」で肯定的な回答が60%以上	3:			B	0		
		③学習者用デジタル教科書や教育コンテンツの活用により授業を充実させ、生徒が活用しやすい端末の使用方法を実践して、学習環境の向上を図った。	4:「おおむね図られている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね図られている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね図られている」と回答した。 1:「おおむね図られている」と回答した教員が60%未満であった。	3	2:生徒アンケートの設問「学習環境が整えられている」や「安全教育に取り組んでいる」「給食の安心・安全な提供」で肯定的な回答が60%未満	2:			C	0		
		④生徒への学校給食の提供にあたり、保護者との連携を強化し食物アレルギー事故防止を徹底して、生徒への安全安心な給食の提供を推進する。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	1:生徒アンケートの設問「学習環境が整えられている」や「安全教育に取り組んでいる」「給食の安心・安全な提供」で肯定的な回答が40%未満	1:			D	0		
個別目標7 学校・家庭・地域の連携・協働による地域コミュニティの核としての学校をつくります	地域コミュニティの核としての学校づくりや地域の特色を生かした学校づくりを進めるとともに、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域社会全体でこどもたちを育成します。	①「地域コミュニティの核としての学校づくり」を目指して地域と学校が連携・協働した様々な活動を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	4	4:保護者アンケートの設問「保護者会、学年通信等で学校の様子がよくわかる」や生徒アンケートの設問「地域のボランティアに参加し貢献しようとしている」で肯定的な回答が80%以上	4:	4	学校運営協議会を設置して5年目となっており、学校経営への参画、学校の教育活動への協力、行事の企画運営など、学校運営協議会が積極的に活動することができた。吹奏楽部の年度末の定期演奏会を迎え定例化することができており、地域の期待も大きくなっている。また、地域公開講座の企画運営なども行い、地域との連携をすすめ、文化の発信としての役割を果たすことができた。また、今年度の学校における教育活動について適正に評価いただく機会をもつことができている。本校の教育活動の中の支援として、スクールサポート三中と緊密な協力体制を継続して構築し、今年度も年間6回の土曜補習教室の実施や検定支援、職場体験活動の事業所開拓、校内清掃活動、花壇の整備などさまざまに協力いただくことができた。これらは、日頃よりの緊密な連携関係の成果である。本校のボランティア活動についても地域からの信頼があり、町会運動会やガーデンパーティーなどイベントでも生徒のボランティアの活動が行えた。今年度は、12月段階でのべ161名の参加となっている。生徒アンケートでは「あなたは、地域のボランティアや行事に参加し、貢献しようとしている。」については51.4%にとどまっているが、実際の参加状況は昨年度より向上しており、多くの生徒が取り組めるよう今後の取組を期待する。なお、毎週1回の公園ボランティアはJRC部を中心として継続して実施することができた。ボランティアは生徒の力のアウトプットする場として大切なものであり、今後も近隣諸団体、施設等と協働することで、生地域の一員としての自覚を高めていく機会として大切にしていきたい。 次に、学校からの情報発信として、保護者アンケート「学校は教育活動の様子を伝えている」について肯定的に回答した保護者の割合は96.5%であった。日頃の学校の様子の発信については、学校だより、緊急メール、ホームページなどを活用して伝えている。こうした取組の成果が表れている。おおむね学校の様子はしっかりと伝えることができていると考えられる。なお、例年の課題として「学校からの配布物等が保護者にわたっている。」への保護者の肯定的回答は63.3%であり、生徒の肯定的回答は80.3%で乖離がある。これからも、提出物や配布物についての意識を高めるよう学校でも指導していくが、家庭での働きかけも重要である。また、保護者への伝達等については、ICTの活用なども導入していくことが必要である。またICTのリテラシーの醸成についても呼びかけていくことも必要である。今後もICTの活用は拡大していくと考えられるので、整備とともによりよい活用方法を探っていくこととICTの活用姿勢の向上の意識醸成が必要である。	A	11	本校の学校運営協議会の取り組みはモデルとして高く評価されており、事実として地域コミュニティの核として順調に根付き始めている。学校運営協議会も5年目を迎え、ボランティア活動など、地域との深い信頼関係が築かれていることは評価に値する。また、今年度、生徒のボランティア参加が積極的であった。地域における三中生ボランティアの活躍は、とても重要な位置づけとなっており、世代を担う人材育成、地域と学校の絆づくりに貢献している。今後も、より多くの生徒がボランティア体験をされることを期待している。このように、地域の中で文化の発信拠点としての活動が定着してきており、地域活動との連携も進んでいる。さらに、ホームページの更新頻度は驚くほどで、とても細やかに学校の様子が伝わり、今後の学校からの継続的な発信を期待している。
		②登下校の見守り活動等の、児童・生徒の健全育成や安全指導に係る取組を地域の協力により実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	3:保護者アンケートの設問「保護者会、学年通信等で学校の様子がよくわかる」や生徒アンケートの設問「地域のボランティアに参加し貢献しようとしている」で肯定的な回答が60%以上	3:			B	0		
		③家庭教育に関する情報の発信やPTAなどと連携した講演会・学習会、またはその双方を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	3	2:保護者アンケートの設問「保護者会、学年通信等で学校の様子がよくわかる」や生徒アンケートの設問「地域のボランティアに参加し貢献しようとしている」で肯定的な回答が60%未満	2:			C	0		
		④生徒が地域におけるさまざまなボランティア活動に参加するように促している。	4:のべの参加生徒数が495人以上であった。 3:のべの参加生徒数が400人以上495人未満であった。 2:のべの参加生徒数が300人以上400人未満であった。 1:のべの参加生徒数が300人未満であった。	4	1:保護者アンケートの設問「保護者会、学年通信等で学校の様子がよくわかる」や生徒アンケートの設問「地域のボランティアに参加し貢献しようとしている」で肯定的な回答が40%未満	1:			D	0		

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。
○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
○学校関係者評価の「評価」は、A：自己評価は適切である　B：自己評価はおおむね適切である　C：自己評価は適切ではない　D：評価は不可能である　の4点について、評価した人数を記載す